



## 「親」のあるべき姿とは・・・?

新年度が始まりましたが、新しい環境の学校生活になかなか馴染めず、登校に対する抵抗感が強い子どもたちもいることとされます。

さて、昨年の2学期後半頃のことです。

毎日の通勤経路ですれちがう親子連れ——。小学2年生か3年生と思われる女の子とその母親らしい親子でした。いつも連れ添って登校される姿から、「登校を渋るお子さんをなだめながら、いっしょに歩いて登校されていらっしゃるのだろうか・・・?」と、勝手な推測をすることでした。ただ、お子さんの表情は暗くなく、何だか楽しそうにも見えました。それは、「お母さんもいっしょに登校している」という安心感からだったのでしょうか。お子さんに付き添われ、歩いて登校支援をされるお母さんの姿を拝見しながら、「安易に車で送られないのが素敵だな・・・」と思っておりました。



2学期の終業式の日には新たな事実を知り、さらに大きな感動を覚えました。それは——

このお母さんは、学校まで送られるのではなく、学校の百メートルほど手前までいっしょに連れ添われた後、そこからは、お子さんがひとりで学校の校門をくぐるまでじっと見送っておられたのです。「親」という漢字は「木の上に立って見る」と書きますが、正にその漢字を体現されていたのです。

3学期になって、このお子さんは一人だけで登校するようになり、お母さんが登校に付き添われる姿は全く見かけなくなりました。

## 「母の日」「父の日」に寄せて



5月の第2日曜日は「母の日」。そして、6月の第3日曜日は「父の日」。一般的に、母親を「お母さん」、父親を「お父さん」と呼びますが、その由来をご存知でしょうか。「日本のこころの教育」という本には、「お母さん」「お父さん」の言葉に込められた意味や由来が示されています。

歌舞伎では、母親のことを「カカさま」と言いますが、この「カ」が現在も残って「おかあさん」と言うのだそうです。カカの語源は「カッカッ」で、太陽が燃えている様子を表す擬態語。すなわち、日本では、古来からお母さんを「太陽さん」と呼んでいたそうです。母親は、子どもを産み育て、いつも明るくて、あたたかくて太陽のような恵みの力によって子どもの世話をしてくださる。——まさに「母親は太陽さんそのもの」という考えが古来からあって、「お母さん」と呼んだそうです。

では、父親のことをなぜ「お父さん」と呼ぶのでしょうか。

歌舞伎では、父親のことを「トトさま」と言いますが、この「ト」が現在も残って「おとうさん」と言うのだそうです。これは、父親が妻、子どもに危害を与える賊から守ってくれる「尊いお方」とであるというのが語源だそうです。

日本人は、古来より母を「太陽」と呼び、父を「尊いお方」と呼んでいたと知ると、何だか誇らしく思えます。



子どもに親をどう呼ばせるかは、それぞれの家庭や親の判断でしょうが、「太陽のように明るくて優しい温かな母親」「家族のために身を挺して守る尊い存在の父親」でありたいものです。